

3 追 剥

第一部

I.

風はまるで鬱蒼たる木間こまを抜ける激流
月はまるで荒波に翻弄される幽霊船
月明かりに浮かぶ小径こみちが紫色の荒野にのびる時
追剥が駈けてきた

駈けてきた 駈けてきた

5

追剥が駈けてきた 古びた宿屋の戸口目指して

II.

目深に被ったフランス兵帽の紐を顎の下で留め
赤ワイン色のベルベットの着と茶色い鹿革の半ズボンを
皺一つ入れず着こなし 膝上まであるブーツを履いて
綺羅星に照らされ 駈けてきた

10

銃床がきらりと光った

綺羅星もとの下 長剣つかの柄がきらりと光った

III.

小石を踏み鳴らして追剥は 宿の暗い中庭に入り
鎧戸を鞭で叩いたが 門で堅く閉じられた
窓に向かって口笛を吹いた 窓の向こうで待っていたのは
黒い瞳の宿屋の娘

15

宿屋の娘 ベス

その豊かな黒髪に深紅の恋結びを編んでいた

IV.

暗い中庭の片隅で厩うまやの戸が軋む音がした
青く裏れた馬丁のティムが密かに聞いていた
その目は狂気に落ち窪み 髪は土に塗れた枯草のよう
ティムもまた愛していた 宿屋の娘を

20

赤い唇の宿屋の娘を

ティムは息を潜め 盗人ぬすっとの言葉を聞いていた

V.

「口づけを 愛しい人よ 今宵俺は獲物を狙う 25
明日陽が^{のぼ}る前には黄金稼いで戻ってこよう
だが追手が掛かり 一日追われたなら
月明かりで俺の姿を探してくれ
月明かりで俺の姿を見つけて欲しい
たとえ何があろうとも 月明かりが差す頃までには戻ってくる」 30

VI.

追剥は^{あぶみ}鐙に足を掛け立ち上がったが 娘の手には届かない
ベスは窓から髪を垂らした 追剥の頬は松明のように赤く燃えた
髪が追剥の胸元に 黒く^{かぐわ}香しい滝となって流れ落ちた
追剥は月明かりに照らされた黒髪に口づけして
(ああ 月明かりに照らされた^{かぐわ}香しき黒髪よ) 35
月明かりの^{もと}下手綱を引き 西に向かって駈け去った

第二部

I.

夜が明けても 昼になっても 追剥は戻ってこなかった
空が黄色に焼け まだ月が^{のぼ}る前
小径が^{こみち}紫色の荒野に弧を描いて怪しげに揺れる頃
赤い外套の一团がやって来た 40
やって来た やって来た
ジョージ国王の兵士たちがやって来た 古びた宿屋の戸口目指して

II.

兵士たちは宿屋の主人に断りもせず ^{エール}酒を飲んだ
宿屋の娘に^{さるぐつわ}猿轡を噛ませ 小さなベッドの足に縛り付けた
二人が窓際に ^{ひざまず}跪き 脇にマスカット銃を構えた 45
あらゆる窓に死神が潜む
そのうち一つはまるで地獄絵
なぜならベスには見えたから 追剥が駈けてくるはずの道が

III.

兵士たちは娘を立たせると にやにや笑いながら
マスカット銃を娘の脇腹に^{くく}括りつけ その胸元に銃口を向け 50
「さあ しっかり見ている」と言って口づけした
娘の耳には死者の声が聞こえていた
月明かりで俺の姿を探してくれ
月明かりで俺の姿を見つけて欲しい

たとえ何があろうとも 月明かりが差す頃までには戻ってくる 55

IV.

娘は後ろで縛られた手をひねったが 結び目は固すぎた
娘は手を激しくひねった 指を濡らすのは汗か血か
指を曲げ 指を伸ばす 時は遅々として進まなかった
ついに時計が真夜中を打った
冷たい 真夜中の時計の音 60
ついに一本の指先がそれに触れた 引き金は娘の思いのまま

V.

一本の指先がそれに触れた 指先ひとつで十分だった
胸元に銃口を当てたまま 娘は背筋を伸ばした
兵士たちに気づかれぬよう もう抗うこともしない
月明かりの道には何も見えない 65
月明かりの道には何一つ見えない
月明かりの下 血潮が恋人の約束に^{もと}応えるかのように^{みなぎ}漲った

VI.

タタッ タタッ 兵士たちには聞こえただろうか 蹄の音がはっきりと
タタッ タタッ 遠くに響くあの音が 聞こえなかったはずはない
丘を超えて 月明かりに浮かぶ^{こみち}小径を 70
追剥が駈けてきた
駈けてきた 駈けてきた
兵士たちは^ま標的に目を凝らした 娘は背筋を伸ばした

VII.

タタッ タタッ 霜降る夜の タタッ タタッ 夜の^{しじま}静寂に響く
あの人^が近づいてくる 近づいてくる 娘の顔がきらりと光る 75
娘は目を見開き 最期の息を深く吸った
月明かりに照らされて 娘は指を動かした
マズケット銃が月明かりを撃ち砕いた
月明かりを浴びる娘の胸を撃ち砕き 死をもって恋人に危険を知らせた

VIII.

向きを変え西へと駈けた追剥は 知る由もなかった 80
マズケット銃の上に身を折って 血に^{まみ}塗れていたのが誰だったのか
夜明けになって真実を知った 追剥の顔に影が差した
宿屋の娘 ベス
黒い瞳の宿屋の娘が
月明かりで自分を見つけ 暗闇の中で死んだのだと 85

IX.

怒り狂った追剥は虚空に罵^{ののし}り声を響かせ 馬を駈って戻ってきた
背後に白い土煙を上げ 長剣を高く振り上げて
拍車は黄金の陽を浴び血の色に染まった ベルベットの上着は赤ワインの色
兵士たちに撃たれた追剥が街道に倒れた
街道に野良犬のように倒れた 90
街道で血の海に身を沈め 兵帽の紐は喉元に落ちた
・ ・ ・ ・ ・

X.

真冬の夜の静寂^{しじま}に 風が木々の間を吹いている
月はまるで荒波に翻弄される幽霊船
月明かりに浮かぶ小径^{こみち}が紫色の荒野にのびる時
追剥が駈けてくる 95
駈けてくる 駈けてくる
追剥が駈けてくる 古びた宿屋の戸口目指して

XI.

小石を踏み鳴らして追剥は 宿の暗い中庭に入り
鎧戸を鞭で叩くが 門で堅く閉じられている
窓に向かって口笛を吹く 窓の向こうで待っているのは 100
黒い瞳の宿屋の娘
宿屋の娘 ベス
その豊かな黒髪に深紅の恋結びを編んでいるという

(宮原牧子訳)